

式辞

3月に入り、ここ十勝もようやく長く厳しい冬を脱したようです。色鮮やかな春が足音を響かせながら、すぐそこまでやってきているように感じます。この良き日に音更町議会議長・小野 信次様を初めとして多くのご来賓をお迎えし、第55回卒業証書・学位記授与式を執り行えることは、本学にとって、誠に有難いことと御礼を申し上げる次第です。

ただいま名前を呼ばれました地域教養学科40名、生活科学科栄養士課程38名、社会福祉科子ども福祉専攻52名、同・介護福祉専攻20名 計150名の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

諸君は、多くの実習を積み重ね所定の単位を取得し、それぞれ専門家としての能力をしっかりと身に付け、いよいよ社会に乗り出すわけです。

思えば、2年前、私は入学式で入学される皆さんに向けて、私が大事だと思ふ言葉を2つ投げかけました。一つは好奇心、そしてもう一つは想像力であります。どうでしょうか、この2年間の学生生活のなかで意識した場面はあったでしょうか。

多くの出来事に向けてたぐさんのアンテナを張り巡らすことで、自分の度量を大きくし、それが、結果、成長につながる。これが「好奇心」でした。また、他者に向けて可能な限り気持ちを寄り添わせ、自分のこととして捉えようとする力を身につけること、これが、「想像力」でした。これら、2つの力はこの2年間の学生生活でおそらく皆さんにいろいろな形で備わったのではと、私は確信をしています。

時代は人と人との絆を弱め、自己中心的な独りよがりの人間をた

くさん生み出してしまったように思います。皆さんが身につけたであろうこれら2つの力は、おそらく先の見えにくい現代社会でこれから生きていく諸君にとってとても重要な能力になっていくでしょう。

作家・天童荒太（あらた）氏に「悼（いた）む人」という長編小説があります。直木賞を受賞したことでも有名になった作品です。事件や不慮の事故で亡くなった、しかし自分とは全く縁もゆかりもない人達の最期の地を旅し、辿り着いたその地で哀悼の意を表し、まさに「悼む人」として生きる若者の姿を描いた作品でした。映画化もされましたので、ご覧になられた方もいらっしゃるかもしれませんが。いろいろな思いを抱いて亡くなった人たちの悔しさを思い、悼む、そんな青年の姿が感銘深く描かれていました。

結局のところ、他者のことはわからないのです。だからこそ、必死にわかろうとしなければいけないのです。人は一人では絶対に生きてはいけません。人との絆をいっそう深めていくために、以上お話ししましたように、他者の立場に立てるような柔らかく豊かな想像力と積極的な好奇心が、だからこそ大事になってくると思っています。これからの皆さんの進路はいろいろでしょうが、是非今後とも、この2つの言葉を頭の片隅に置いておいていただければ、嬉しく思います。

これからの時代は皆さんの世代が中心になって回っていきます。今の時代は必ずしも皆さんにとって素晴らしい時代とは言えないでしょう。むしろ、生きにくい時代と言っているのかもしれませんが。それはどうやら、我々大人の責任と見えそうです。我々は皆さんに上手にバトンを渡せなかったのかもしれない。しかし、皆さんは、どうか、皆さんの次の世代にうまくバトンをつなげるような、そんな社会を作ってください。期待しています。

保護者の皆様、本日は誠におめでとうございました。今ここにい

る学生たちは皆、個々に素晴らしい成長を遂げました。そしてこれから社会の荒波に飛び込んでいきます。一安心とは存じますが、しかし時に応じて、先達としてのアドバイスを是非お願いしたいと存じます。人は誰かの言葉を肯定、否定しながら自分の道を決めて行きます。他者の言葉が先にあると初めてそれをきっかけにし、自らのスタートを切ることができるようからです。人生の先輩として今後とも関わっていただけると幸いに存じます。

さて、卒業生諸君、いよいよこの春から社会人ですね。残念ながら、社会には未だに理不尽なことが数多く存在していると思います。どうか、辛い時、寂しい時、あるいは道に迷った時にはこの短大の学び舎を思い出してください。気分転換に寄ってみてください。帯広大谷短期大学はいつまでも変わることなくここにあり続け、皆さんを待っています。

最後になりますが、本日までご参会をいただきましたご来賓の皆様、保護者の皆様、そして何より150名の卒業生諸君の未来に幸多きことを祈念いたしました。式辞といたします。

2016年3月18日

帯広大谷短期大学

学長 田中 厚一